

hito*yume
インタビュー

巻頭特集

書道家 武田双雲

「人生は、エンターテインメント」

映画・ドラマなどで数多くの題字、ロゴを手がける人気書道家の武田さんは語ります。
とっておきの書道講義を交えながら、手で書く醍醐味、
いま先生方に贈りたい言葉を伺いました。



【たけだ そうん】

1975年生まれ。熊本県出身。
東京理科大学工学部卒業後、NTT勤務を経て書道家として独立。さまざまなアーティストとのコラボレーション、斬新な個展など、独自の創作活動で注目を集める。NHK大河ドラマ「天地人」、スーパーコンピューター「京」をはじめ、数多くの題字、ロゴを手がける。メディア出演も多数。約300名の門下生がいる書道教室「ふたばの森」主宰。近著に「疲れない!! 楽しいを感じて、話して、書けば、人生は◎」(幻冬舎)など、著書多数。3児の父。

メインディッシュの
お口直しに、
ティッシュをどうぞ。

ティッシュは、
あなたの肌にあと何回触れるだろう。

メイクのあいまに。涙のあとに。
ごはんのときに。

どんなときであっても、
その瞬間がやさしく、
心地よいものでありますように。

アクアヴェールは、
うるおい成分が水分をキープするから、
しっとりしなやかな、
肌専用ティッシュです。

Kleenex[®]
BRAND
HIGH QUALITY FACIAL TISSUES

Aqua Veil
アクアヴェール



親への反抗期は全くなかった。
「だって全肯定だから、する理由がないでしょう」



子供たちの「書く」ワクワク感を、 どれだけ盛り上げていますか。

潮風がほのかに吹く初秋の湘南。駅を降りると、どこか都心よりゆつくり流れる時間を感じる。そんな閑静な街の一角に、武田さんの書道教室がある。壁や階段の手すりにじかに書かれた巨大筆文字に目を丸くしていると、作務衣に身を包んだ人懐こい笑顔が現れた。
「足、崩してくださいね。正座はもともと日本人にはなかった座り方だから」
愉快的な雰囲気身をまよとわせ、185センチの大きな体をゆったりと座らせた。

3歳のときから 書家である母に師事。

お生まれは熊本県。小さい頃はどのようなお子さんでしたか。

いつもニコニコ。おっとりしていて、底抜けに明るい子でした。その頃のまま、こうして四十になった感じです。

家の中はもう、騒がしかったですよ。両親ともよく喋るし、おとなしい彼らなんて見たことない。仲はいいんだけど、ちょっとしたことでも言い争いが始まって。夫婦喧嘩は我が家の恒例行事でした。

父は僕に対してことあるごとに「大智(武田さんの本名)、お前は天才たい」と言ってくれた。二人の弟にはそうせず、なぜか僕にだけ特別に。僕が

そういった瞬発力は書にはとても大切で、僕は書道家になつてよかったなと思いますよ。

心に残る先生は。

小学1、2年生のときの担任の米田先生という女性の先生。ハキハキしてよく笑い、泣き、怒り、何事も一生懸命。まさに「昭和の先生」で、とても可愛がってもらいました。

米田先生とはいまも文通しているんですよ。ときどき先生手縫いのクッションを送ってくれるんですが、それがすごく派手でファンシーなもので(笑)。

何しても「天才だ!」と感動しちゃう。「その喋っている角度がいい!」とか(笑)。
だからこれまで、親から否定的な言葉をかけられたことは一度もないんです。

叱られたり、「こつしなさい」と言われたりしましたか。
一切ないですね。何があっても父は「天才だから、よかたい」つて。大人になつたいまでもそれは変わらないです。

幼少時に書家のお母様(武田双葉氏)に書を師事。指導は厳しかったですか。
3歳の頃から叩き込まれました。といつても甘々ですね。書くこと「いいなあ!」つて感動されていましたから(笑)。将来書道家になれとも言われませんでしたね。

両親にはそうして手放しに感動され続けてきたので、僕自身と比較するとか評価を気にするとか、そんな感

温かい先生との絆が
いまも続いているのですね。

以前「自分は人から見たら、空気が読めない子なのでは?」と、聞いたことがあります。すると先生はこう言ってくれた。
「私はいままで何千人何万人見てきたけど、あんたはピカイチたい!」。そのほめ言葉がいまも強く心に残っていますね。

「お題」を投げかけると、 楽しみながら 思考が深められる。

本日は、小学5年生が実際に授業で使っている「書写ノート」を持ってきました。

(手にとつてめぐり)なるほど...こうして子供たちに筆を握る機会を設けていただけなのは、書道家として本当にうれしく感じます。

武田さんは全国の小学校で講演活動もされていますが、子供たちが字がうまくなる指導のコツ、秘訣をぜひ伺いたいと思います。



小学4年生の頃、夏祭りでの母と。

担任は、昭和の先生。 いまでも文通し合う仲。

覚は全くなく育ちましたね。

小学校時代はどう過ごしましたか。

活発で運動神経もよくて学級委員長も任されたし、たくさんの習い事も楽しみました。

ただ競争心はなく、目の前のことに集中して楽しんでしまう。野球をしていてもボールを打った先で見つけた土を突然観察し出したり。「1+1はどうして2になる?」と疑問に思ったらすぐ先生に質問したりしていた。いわば「空気の読めない子」でしたね。

子供が書くことを楽しいと感じること。それには教える先生自身がいかにか「書くことの楽しさ」に気づいているかでしょうね。
ケーキを食べたことのない子だったら「ケーキっていうのはチョーうまいんだよ!」このスポンジがさ...と熱く楽しく伝える。そうすれば相手も食べたくなるでしょう。それと同じ。「このサンズイの二画目、すごくない?」とか。字を書きたくなるワクワク感をいかにつくるか。

僕が以前指導した例では、「リレー書道」があります。「た」という字を、子供4人で1チームとなつて、それぞれ一画ずつ書いてもらう。「先鋒」から子供たちはすごい気合いを入れて書きますよ。

バトンをつないで一字を書く「リレー」。一人一人が責任重大。

一画ごとに大盛り上がりです。

僕は一人でも、リレー書道していませんよ。一画目は、これまで書いたところのない場所にあえて書く。そして「うわつ、この先どうする?」なんて自分言いなながら書いていく。一人で盛り上がる(笑)。

そうして書くことで、「ではどうやって何だろう?」「下手って何だろう?」「魅力とは?」と哲学的に思考は広がる。歴史、科学など各分野に発展していく。

自然と子供は思考を深めていく。

僕の書道教室では子供たちにそのときどきで「お題」を投げかけることもありますね。

マツタケの写真を見せながら、お題を「秋」にする。自分ならではの秋っぽさを出した秋の字を書いてもらう。するといろいろな「秋」が出てきます。もう無限に出てきます。

「歯ブラシで書く」というお題のときも。そのことで「筆」のすこしも理解できるんですね。

でこぼここの個性を表現することが、「生きる力」を育てる。

一般に書道は「お手本」に近づこうように練習するイメージですが。

現実社会はテストと違って、正解がないです。これからの時代「お手本がな

い状態でどれだけ書けるか」がポイントでしょう。

ところでこの間、車でアメリカ横断の旅をしたのですが、飛行機とホテルの予約はすべて小学5年生の長男に任せました。彼はインターネットの評価サイトを検討しながら格安で立派なホテルをとってくれた。僕もIT分野には強いけれど、息子はいきなりすごいレベルだったのでびっくりして。彼は数種の経営ソフトも使いこなすし、いまは出店の相談もしているくらいです。

小学5年生のビジネスパートナー。

東大出よりも頼りになる(笑)。

教育もこうして子供たち自身が主体となって授業を組み立てる時代が来るだろうし、ICT教育が主流になる中、先生はコーディネイターのな役割を担うかもしれませんね。

画一化から多様に、教育のあり方も変わっていくのではないかと。

ちょっと刺激的な話かもしれませんがね。でも、旧来の「がんばれば何とかになった時代」から、「型がない、答えがない時代」を生きた子供たちに、クリエイ

いま先生たちに、「楽」という文字を贈りたい。

ティビティーやコミュニケーション能力をつけてもらいたいです。人と意見が違うとき、いかにそれをプラスにしていけるのか、1+1が2にならないことがなぜ起きるのか、ではどうしたらいいかと。それが、「生きる力」につながるのではないのでしょうか。

そうして子供たちから出てくる個性を引き出し、自己肯定感をもたせる。幸せになるために、でこぼことした自分の個性を活かす道をつくっていくように指導したい。だから僕の教室は「字がうまくなる教室ではありません」(笑)と書いています(笑)。

日本の書道文化が危機? 「手で書く」魅力とは。

ITのお話が出ましたが、現在書道界が一丸となって「日本独自の書道文化」をユネスコの無形文化遺産に登録しようと動いているとか。字を書く機会が減ると、書道文化は衰退してしまうのでしょうか。

大きな危機を迎えているのは確かでしょうね。筆どころかペンさえなくなるかもしれないから。ただ僕はそのことをポジティブに捉えています。そんな時

代だからこそ書道家の価値が際立ち、手書きの良さ、珍しさが注目されるのではないかと。

大好きなITと書道を融合させ、新しい形で魅力的に発信できる。逆にチャンスだと捉えていますね。

では改めて肉筆、「手書き」の魅力とはなんでしょうか。

ノートの紙に鉛筆の芯が、めり込んでいくのを感じながら、ゆつくりと二画一画整えて書く。その瞬間瞬間を味わい、文を綴る喜び、文字の美しさを堪能しながら、丁寧に書き進めていく。書道は瞑想に近いのではないかと感じますね。だから書いた後は、温泉に入った後みたいにスッキリする。

手で書くことは、自分の感情をアウトプットする行為でもあります。

うまく書けると最高ですね。

ところが「うまく書く」と思うと、書けなくなる。僕が教える学校の先生方もみんなマジメ



自分の手や足、目の前にあるカップの存在一つにも感謝する。
「いまここがないものを追い求めても、虚しさだけが残るんです」



小学5年生の頃、書の前で弟の双龍と。



楽しんでやった方が、文化や伝統は後世に残るものになりますから。

僕は日々いろいろなジャンルの方と出会い、コラボする。そこで新しいものが生まれる。それが楽しくてたまらないですね。

何事も常に実験です。息子のオムツのかわり方も毎回かえてくる(笑)。生きていることは「お題」だらけだし、やり方は無限にあります。何でも感動するのは僕のクセだけど、「自分の人生こそ、最高のエンターテイメント」だと感じていますね。

最後に、日々奮闘されている先生方にメッセージをいただけますか。

「先生であることを、楽しんでくださ」といっていいかと。

朝、学校へ行く道を楽しみ、授業一つを堪能し、子供たちとのふれあいを楽しんで、味わってほしい。

先生方が日々忙しく、事情もいろいろあることは、全国の学校を巡ってきて僕にもよくわかっています。その上で改めて言いたい。

指導がうまくいかないときは焦ってしまつこともあるのでは…。

そういうときは、その焦っている感情を受け止めて味わつちやえばいいんですよ。(手のひらを見て)「あ、いま自分、焦りあるな」って。「子供は反抗するほど成長してるんだな」とか。その気持ちを否定も肯定もせず受け入れ、「無」に戻すクセをつける。般若心経(はんんにゃしんぎょう)でいう「無明」(むむみやう)「無無明」行を、実践哲学としてやる。

まずは、ご自身の波動、気を整えることから始めていただく。気持ちよく起きて、気持ちよく寝る。

そうして背負った荷物を下ろして、「いまあるもの」に目を向けて楽しんでいけば、おのずとよい授業になるし、子供とい関係になって、学校経営もうまくいくのではないのでしょうか。

先生方には「楽(らく)」という文字

を、僕から贈らせていただきたいと思えます。

インタビューが終わる夕刻、ランドセルを背負った子供たちが三々五々やってきて、卓にべたんと座っていく。これから書道教室の時間だ。武田さんが声をかけると子供たちもぎやかに返す。そこにはゆるやかで自由な時間が流れている。

数メートルの巨大な紙に、文字を一気呵成に書きつけていく瞬発力と集中力。1丁に精通し、楽々とジャンルを飛び越えていく自由で柔軟な感性と思考。それはお父様がかけ続けた言葉「よかよか、天才たい」「先生の言葉」「ピカイチたい」という、オンラインワンのメッセージに支えられてきたものではないか。

未来よりもいまこの瞬間。まずは気を整えて。肩の力を抜いていこう。

読者

プレゼント!



著者サイン入り

武田双雲さんの著書『のびのび生きるヒント 真面目に頑張っているのになぜうまくいかないのか』を5名様にプレゼントします。応募の詳細は35ページをご覧ください。